

程マカンの音の勝れたるは稀なりしと云ふ享保三戌年一月豊竹上野の少様を受領し重勝と改名す全十六年亥十月大内に召れ孫庇しの許にて淨るりを叔聞に備ふ帝御感ましまし越前少様を許され尙給旨の奥に塵梁軒と御書添を賜はり前代未聞の面目をはとこしければ此鳥帽子装束を白木の台に載せ受領祝儀淨瑠璃を自分芝居にて興行す、ワキ豊竹和泉太夫三味線竹澤藤四郎勤ひと云ふ明和元年申九月十三日八十四才にて寂と法名を一音院眞覺隆信日重居士と号す天王寺西門の傍らに古墳あり、

第三章 淨瑠璃の小沿革及階級稽古法の事

初も今を去る五六十年前は當今の如く誰も彼も且那も番頭も猫も釋子

も淨瑠璃を語る杯の事はあらず僅かに五六人此廣き大阪に素人淨瑠璃ありし迄とや左れば實に稽古するは商賈人即ち太夫の候補者か三味線弾きのみ何とて此六つヶ敷き物を忙しき商賈の合に志を寄せらるべき然しながら當今上達せし人々は兎も角習掛けの語り人は昔の如く非常に嚴重の稽古はせられざるべし尤も商賈の合に銳氣を養はん速保養がてらの藥風呂ならで保養がてらの藥稽古なれば世の開進に伴ひ益々盛大とありしや疑なし左れば社の一町内に京も大阪も東京も稽古屋のなき所はなく殊に根本とて我大阪の如きは町内又同士も隣全士もあり少くも一町内に二三軒は鑑にありと覺へたり實に衛生を主とする今日柄なれば鬱氣を發揚して胸膈を開く實に此上の事なし扱も有がたき淨瑠璃かな左りながら皆が皆まで此思はくに依つて稽古すればうまからうが不味からうが聲がよからうが調子が參るまいが我面白の樂遊びなれば鎗を附られうが鐵砲を向けられうが頼んどお構なき筈なれ共す

でに玉三一冊どうやら此うやら口解きが済むか済まぬに、先づ大体は一方太夫を凌ぐ程の業前ありと自負するは、おはむね我聲の耳に入らぬか師匠の辨口に逆せ上らるゝの結果にして、實にも情なき至極果放なき有様ながら、之れ如何とも詮方なき次第なり然る程に先づ保養的稽古と雖も昔流の稽古即ち端場より道行景事と第一節の名目を謹んで會得し、進んで段物を稽古しられんには、奥儀も玄妙も日に進み月に其面白味を會得するに譯なき事なれ共、方今手前等は勿論我連中の稽古を觀るに唯師匠の口吻を真似る迄にて一段の物を習切るは習にあらすして日を重ると供に自然又大体を真似るゝ外ならず、左れば極簡單なるハルフシスエブシの如きも抑揚浮沈更らに闇の如く仔細に綿密に習得せず唯紙數の多き真似早きを天狗するが如き、十中の八九皆此寸法あり、されば大會に待々として舞臺に昇り泰然とうなり出すも一ト度障碍るか抑又鎗を食ふか三味線の受けを間違へらるゝに於ては、恰も場馴れぬ武者が初陣

亂軍又向ふが如く四方八方煙霧に在つて、耳熱して自見ぬず聲は救を呼に似て糸の音は陣鐘に聞ゆ、晝をあざむく銀燭は火炕の如く見ゆるに相違なし愉快か不快か前後滅却更に途方もなき始末に衆笑に送られて舞臺を下るとは如何に情なき勘定の合兼る次第ならずや、是れ實に闇に鐵砲を放すと全然にて當るゝ當らぬか更にわからず、保養的精神は論なく功名手柄は遙か去つて近く來らず、即ち之を闇鐵的淨瑠理と命名を實に不感心の至りに堪へねば、予鋤月何とかして是に階級稽古法を組み立て徒らに自儘に無上矢鱈又調子外れの不規則稽古を矯正せん、連年來種々是れに關する諸書を取調べたるに隨分冊數は不足なれど目下流行の物と昔の淨瑠理とは丸で物も換はれば品も全様ならず、見ても讀んでも何が何やら譯り切らねば心配に心配を重ね、工風に工風をこらして本書を綴り上げたり、専門の太夫諸氏は何が扱是式と見も返らぬか知れぬと都鄙山村は云ふ迄もなく何れの稽古屋と雖も保養的連中と雖も下に

連記するが如き順序を以て抑揚長短浮沈の序破急を段々に會得し、一葉々仔細に研究を重ねたらんには、星霜を重ねるに隨ひ音聲の調子を得るに供に、事なく其深遠なる玄妙を覺知するは別段六つかしき事にはあらす。左らば節を別ち仔細に是れが説明をなさんに

第四章 語り方心得の事

先づ我學ばんとする淨瑠璃は事の顛末年代の何日頃と作者の了見を宜く會得せん事肝要なり。即ち忠臣藏の如き主人公大星由良之助の事實は一城を補佐する太夫にして、言行淨瑠璃文句の如くふらずと思惟するも、奇代の名人作者出雲は其人を見るが如く書作したる其心を失ふべからず。元來淨瑠璃は天地間に顯れ来る萬般の形象洩らさずあまたす之れに有れ共、藝代に寄つて事物の違ひもあり貴賤老幼各一様ならずと雖も先づ左の心を以て、先輩の語傳ふる處師匠の教習を受け我れは精神を之れに運んで其心を失はざらんには、音聲の如何によらず

聞苦しき事あるべからず

○まくら即ち語山 聴衆の耳を寄する事肝要なり。耳をよするとは心を傾け一意我が語る處ろを開澄ましむるやう、時代物なれば聲に威を附け、花やかなる世話狂言なれば鬱陶しからぬよう面白く語り出を云ふ事にて流儀によりて種々ありと雖も、多く小音を以て耳を傾けねば聞ぬ位に語出す。予は之れを良法と心得たり

○時代 出し物の都合によると雖も、おはひね語る處の人物戦乱に携はるか女と雖も重なるは夫々一ト解あれば地合も詞も惣じて威儀正しく位を備へて語るべし。左りながらあまり重々しからぬ様緩急配置よく注意大切なり

○世話 狂言の趣意は大概戀の所分けと人情のからむ處に外ならざれば作者在世中自分の見聞を綴りたるが多ければ其心にて語らねばならず。左れば詞も常に物言ふが如く、さらくと重々しからぬ様地

合もねばらずちようど我聲相當にばんじ作らず、輕妙に語るをよしとす。附けて云時代世話と云ふ事あり、前に述ぶる意を折衷して語るべし。

○道行 とは即ち淨瑠璃中旅行の段にて、文章の多くは地合を以て充されたるが多ければ、萬事花々しく語るべき物なれば、必ずシテワキツレと數人にて語る、是等はあまり素人にて語らねども、もし語るべきあればワキツレはシテの聲に障らぬやう、つけふしの連絡に間の隙かざる様、少しシテの跡よりうみ字の引張りに注意をせし。

○景事 此れとても粗ば前の道行に似たる物にて、見物の眼界否耳底を洗ふが如く、總而の陰鬱たる感じを一掃するの目的にて、必ず一日中の最後に演ずる物なれば、矢張り花々しく面白く前全様の注意を以て語るべきものとす。

○ちやり 予淨瑠璃稽古中ちやりと云へる言辞の起りを尋ねたるに

ちやり場と云へるは即ち闇梨場と云へる言辞の轉訛にて、嘗て河内太夫和田合戰鶴が岡阿闇梨手負の振りを以て追人を欺むくの文章ふしの配合至極輕妙にて、見物の頤を解くが如き妙味ありしかば、夫より文の面白き節の輕妙滑稽と糾らす場をちやりと唱へ來るとや、うれは扱ちやり即闇梨場を語らんとすれば、我より笑ひかゝるべからず又取つて附けたるが如き苦しさ笑ひを以て、聞人を笑はせんとするは策の淺果敢なき限りにて謹しんで情を語るを以て自然な笑は引出さるべしとや、よく心を落し附けて考ふべし。

第五章 老幼貴賤氣持の事

以上は淨瑠璃を語るに附て其大体の心得を記したるものなれば、先づ充分會得あるべし、是より時代世話と其人物によつて發する言氣の心得を豫め摘んで其主なる物を擧げんに

○殿上人 とは親王公卿の如きを云ふなり、即ち中將姫古跡の松の豊